

私と郷土と文学 ⑪

大河原町から柴田町へ向かう国道四号線バイパスが、葦神山(にらがみやま)を掠めて走っている。葦神山の所在地は村田町になる。ここに「奥の細道・葦神山」という案内がある。芭蕉は元禄二年(一六八九年)旧五月四日に確かにここを通り過ぎている。

しかし、残念ながらここでは俳句を詠まなかった。後年、この芭蕉に心酔した江戸末期の大河原の俳人、村井江三(こうざん)が自費で句碑を建立したのだ。石碑に刻まれた句は「鶯の笠落としたら椿かな」江三は、この葦神山の辺りに庵を結んだといわれ、この風景を愛していたことが偲ばれる。

大河原といえば、歌人、佐藤佐太郎を忘れることができない。佐太郎には生涯の師匠がいる。蔵王連峰を挟んだ向こう側の上山、斎藤茂吉だ。蔵王の熊野岳の

頂にはその茂吉の歌碑がある。「陸奥をふたわけざまにそびえたまう蔵王の山の雲の中に立つ」

その蔵王を仰ぎ見るように佐太郎の歌碑が町内甲子公園に建つ。「生まれしより六十年か低山の上に蔵王の残雪光る」お互いの魂を呼びかけあうような短歌(うた)になっている。奥の細道の道すがら、芭蕉も何度か振り返ったであろう蔵王連峰。

村井江三も「耳順(じゅん)のとしをかえて」として詠んだ句がある。耳順とは六十歳の別称である。「花一つさけば盛りや福寿草」さて、私は当年、六十を過ぎること二二歳。俳句も短歌も詠んではいけない。(鈴木正博)

「私と郷土と文学」の原稿募集約600字で会員のみさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

陸奥をふたつに分ける蔵王連峰



Photo by Ryuji Sasaki

風と歩こう

文学館は溪谷上に建っている。浮いているような、でもどっしり感がたまたよう。この言葉の杜の館から出て自然の森に入ってみる。

歩きはじめたばかりのいい所に扇畑忠雄先生の歌碑が、少し行くと富田博先生と海鋒義美先生の「春の足音」の楽譜の碑がある。周辺のアジサイはドライフラワーのようになつたまままで花をつけ、それはそれでなんとなくいい。他の茎の突端から赤芽が芽吹いている。春はそこまできてくるのだ。

半円形のベンチに腰を下ろすと立派ないい形をした黒松の樹が一本雄雄しく見えた。木々の間からは雪をかぶっている泉ヶ岳がくつきりと目にはいもつと歩いた。枯れた松葉に覆われた「赤松の道」はふかふかで気持ちがいい。湧き水ありの案内板の所で引き返した。

春はほらほらもうすぐそこまできていよとハミングしながら。(一)

会員情報コーナー

▽伊勢民夫さん著「仙台城下の商人(あきんど)群像」(国宝大崎八幡宮 仙台・江

戸学叢書、648円)が出版されました。執筆途中だった遺稿を仙台市博物館スタッフがまとめたもの。伊勢さんは2015年に逝去されるまで、長年、文学館友の会会員でした。

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第53号をお届けします。

▽おだやかな日で真つ青な空のもと、青葉山を歩いた。木々には葉がなく野鳥の観察がしやすい。小鳥たちの声に耳を澄ますと安らぎを感じる。ややしばらくいくとカモシカの親子に遭遇。新年早々めつたにない出会いに思わず小躍りした。森の空気は格別おいしかった。(一)

▽それぞれ傾向が異なる読書会にいくつか所属している。事情でこのところ欠席続きだ。後で例会の様子を知らせてもらう温かさが有り難い。欠席が長引けば迷惑かとも思いながらも、やめられないでいる。(近)

▽薬師寺東塔の修復に携わっている人たちは、千三百年前の職人と会話しているのだらう。そして、千年後の職人との出会いを信じて作業をしている。彼らが「一度だけタイムマシンに乗せてあげます」と誘われたらどうするだらう。私は「曾孫の孫に会いたい」と言えるだらうか。少し怖いけれど、せめてそれくらいは、確信を持って答えられるようにしたいものだと思ふ。(和)

▽文学館の池にかかる橋の上を歩いていると、水辺の石の上に白いサギが1羽、長い首をS字の形にして佇んでいた。思いがけない光景に「あつ」と声が出て立ち止まり、目は釘付け。聞けば毎年寒い時期に、時にはつがいや子育てで来るのだとか。高貴な姫君の雰囲気を持ったあの白い鳥、春にはいずこへ？(佐)

文学の杜 仙台文学館 友の会会報 第53号 平成29年3月20日発行



とよたかずひこ ももんちゃんぼっぼー

私にわたり親しい間柄だった嵐山光三郎、村上春樹、和田誠、三氏の仕事も紹介します。ひとつの時代を風のように駆け抜けた安西水丸の作品展をぜひご覧ください。

新年度は「イラストレーター 安西水丸展」から

29年度展示 夏休みは「とよたかずひこ絵本世界」

仙台文学館の今年度は、特別展「イラストレーター 安西水丸展」でスタートします。安西水丸は、70年代から長年にわたり活躍したイラストレーターです。画面の要素を出来る限り削ぎ落としながらも、柔らかくユーモアに溢れる彼のイラストは、ときに優しく、ときに鋭く、見る者を魅了しました。漫画・絵本・小説・エッセイの執筆や翻訳など、枠にとらわれない多様な活動をおこないつながりながら、「イラストレーター」であることへの誇りを大切にされた安西。本展では、幼少期から晩年に至るまでの足跡を、イラストレーションの作品を軸に辿ります。また、公



安西水丸 Photo by Nakano Masataka

「守り人」シリーズを中心に、上橋さんの作品世界の魅力を紹介いたします。そのほか、イベントや講座も充実した

- ◆特別展「イラストレーター 安西水丸展」 4月28日(金)〜6月25日(日)
◆夏休み企画「こども文学館えほんのひろば」とよたかずひこの絵本世界」 7月15日(土)〜8月27日(日)
◆特別展「上橋菜穂子と「精霊の守り人」展」 9月16日(土)〜11月26日(日)
◆企画展「井上ひさし資料特集展 vol.1」 7月
◆新春ロビー展「100万人の年賀状展」 平成30年1月10日(水)〜2月12日(月)

文友一滴

学習指導要領の改定案で、中小学校の社会科から「鎖国」という言葉が消えたことと新聞に載っていた。歴史研究が進み、江戸後期には長崎、対馬、薩摩、松前の四港を窓口にオランダや中国、朝鮮、琉球等との外交関係があったのだ、正確な表現ではなくなったのだ。読みながら、あら、困ったなと思った。学校で習ったかどうかも忘れてたというのに、意外なほど複雑な思いがあった。これまでテレビの時代劇や歴史ドラマ、クイズ番組から時代小説等「鎖国」を背景とした娯楽の分野に親しんできた。今更ちがうと言われても、おもしろいとは修正がきかない。たまたま二文字の威力の大きさに感嘆した。

「鎖国」DNAのせいにはいかない。一方では、日本人の器用さは、資源に乏しい島国でしかも「鎖国」だから必要不可欠だったとか、西欧諸国が絶賛した絵画や工芸品の芸術性は「鎖国」なればこそ熟成された等々、卑屈と高慢の両方の言い訳にきたのだ。そんな理屈は今後通用しなくなるらしい。グローバル人材育成が緊急な課題だそうである。教科書から「鎖国」の二文字を消すことが、つまるところ世界に羽ばたく人材を輩出することにつながるかもしれない、と割り切れない。片隅で思ったりした。当面は不当な役目を負わせてきたらしい「鎖国」とどう折り合いをつけたものかと考え込んでいる。(近)

友の会随想

文学への愛着が芽生えたのは中学3年のころだった。夏目漱石の「吾輩は猫である」を読んだ面白かった。次に「こころ」を読んだ。前者は難しい漢語を多用した饒舌の面白さでエッセー風。後者はテーマの絞り込みと告白体の深刻さが緊張感をはらんでドラマティック。対照的な作品であり、漱石の多様な世界が文学入門になったことは幸いだった。



私の文学事始め

友の会会員 阿部 友康

高校生になってからは「草枕」「三四郎」「それから」「門」「道草」など漱石全集を次々に読んだ。高校の図書館を利用したので、ずらりと並ぶ全集の読破を思いつき、漱石以外の作家へ進んだ。坪内逍遙、二葉亭四迷、尾崎紅葉、泉鏡花、幸田露伴、樋口一葉、森鷗外、島崎藤村：といった順序で明治の文豪が並ぶ。文語、漢語、候文などがまだ顔を出し、読みにくいのに律儀な付き合ひだった。

高校から大学へと進み、川端康成、井上靖、伊藤整、三島由紀夫、大江健三郎ら昭和以降の作家や欧米の作家にも親しむようになった。時代が進むにつれ、用語や表現方法も内容も多様になる。けれども、読み始めの印象が強かったせいか、私の頭脳は明治の文学に染まり、多大な影響を受けた。歴史を含めて明治への興味はいまだに尽きない。あらゆる

面で現代日本の源流は明治にあったと思ふからだ。文明開化の欧化主義、経済・軍事優先の富国強兵。敗戦までの軍国主義も日清・日露戦争の延長だった。文学においても、現代文学の源流は明治であろう。特に漱石と子規はとも大きな存在だ。2人は大学の同期で親友。今年と共に生誕百五十年に当たる。

展示室の一画が聴衆でいっぱいとなったミニコンサートは、井上作品に関係のある音楽の特集であった。歌ってくださったのは萩原里香さん、ピアノ伴奏は神原光裕さんである。演奏者と聴き手の距離の近さがとてもいい。

作家の姿が見えてくる

井上ひさし資料特別展 Vol. 6

「ドラマ・ウイズ・ミュージック」井上ひさしの音楽世界が4月9日まで開催されている。音楽との出会いから「組曲虐殺」までの、井上ひさしの歴史を辿ることが出来る。井上ひさし資料特集展シリーズで毎回驚かされるのは、作家の妥協を知らない追求の姿勢だ。どこをどう切り取っても、とことんこだわる井上ひさしが現れる。塗りつぶされた原稿、資料への書き込み、その一つ一つが作品となっていく。私た

ちは、展示を通して、その過程をドラマチックに追体験することができる。プロードウェイ・ミュージカルへの憧れと現実の葛藤があったことを、今回の展示で知った。私は、台詞と音楽と唄が違和感なく共存するのが井上ひさしの演劇だと思っている。しかしそれは、いわゆるミュージカルとは違う、とも感じていた。でも、何がどう違うのか分からなかった。その答えがここにあった。「ドラマ・ウイズ・ミュージック」という井上ひさし独特の世界は、憧れと現実の葛藤の中で、生まれてきたものだった。



追憶はうたごえと共に
「井上ひさしが愛した音楽たち」
展示室の一画が聴衆でいっぱいとなったミニコンサートは、井上作品に関係のある音楽の特集であった。歌ってくださったのは萩原里香さん、ピアノ伴奏は神原光裕さんである。演奏者と聴き手の距離の近さがとてもいい。

見学会・文学散歩を振り返る

- 友の会では夏と秋の2回、見学会を実施してきました。過去10年の行き先をあげてみました。
- ①あきた文学資料館 (秋田)
 - ②啄木・賢治青春館 (岩手)
 - ③遠野ふるさと村 (岩手)
 - ④野村胡堂あらえびす記念館 (岩手)
 - ⑤運筆堂文庫山形館 (山形)
 - ⑥吉野作造記念館 (宮城)
 - ⑦塩谷島尾記念文学資料館 (福島)
 - ⑧原阿佐緒記念館 (宮城)
 - ⑨日本現代詩歌文学館 (岩手)
 - ⑩石川啄木記念館 (岩手)
 - ⑪芭蕉清風歴史資料館 (山形)
 - ⑫浜田広介記念館 (山形)

施設見学ばかりではありません。その周辺の小さな美術館や建築物をも見るのがあります。そこに関わる専門の方からのお話や、学芸員さんの緻密に調べ上げられた資料と解説などがあります。一人で出かけたときは比べられないほどの知識満載です。知る楽しさが膨らみ、あとでゆっくりまた訪れたいとか、何度でも行ってみたいというきっかけにもなります。

- ①東北大学資料館
- ②只野真葛の墓碑
- ③晩翠草堂
- ④榴岡天満宮俳諧碑林
- ⑤俳人鬼房の小道(バスで塩釜)
- ⑥スズキヘキの原風景 北目町界隈を歩く

ちいさな訪問客との喜びと悲しみ
平出隆『猫の客』
小説の舞台は、昭和から平成に代わろうとする頃の東京である。子どものいない三十代半ばの夫婦が借りた家は、私鉄沿線にある広い古風な屋敷の離れである。ある日、この夫婦の元をひそやかに訪れたのは、隣家の飼猫「チビ」だった。人にすり寄る気配のない猫と、猫をそっと見つめる夫婦。その距離はチビが家の中に入ってくるようになって一気に縮んだ。掛け布団の上で

第28回読書会

伊坂ワールドにある優しさ

伊坂幸太郎「イン」

読書会ではこれまでずつと純文学を取り上げてきたが、時には別のものを選んだ作品。著者は独特のスタイルを持った仙台市在住の人気作家であるが、この作者は初めてという人が少なくなかった。

緒にデパートの屋上にいる。そこで起こる置き引きを察知する長瀬の、研ぎ澄まされた感覚はみごとで、盗もうとした少女に「お兄さん優しいし、穏やかだし、頭良さそうで恰好いい」と言わせるほどだ。長瀬に対する優子の態度も自然でさりげなく、彼を特別扱いしないところが本当の思いやりなのだと気付かされる。「若い人の浮遊感がよく出ている。文章が柔らかく好感が持てた。色や声というものについて考えさせられた。自分目だけども見えているが、見えない人がなにもかも見ていることに驚く。この作品だけでは視覚障がい者の本当の姿はわからない。タイトルは何を表すのか」などの疑問や感想が出された。



次回読書会は4月12日(水)14時
山田詠美「ベッドタイムアイズ」(河出文庫、新潮文庫)
※友の会会員は自由に参加できます。
申込みは友の会事務局まで。
☎271-3020